フィールド（現場）からの風 202

宮田守男

にぎわう観光地に積極的に出掛け、これからの私たちの地域の在り方について考えてみませんか

9月上旬、台風13号が北上して、温帯低気圧に変わり大気が不安定になり大雨が心配される中、飛騨高山方面に日帰りの旅に出かけた。往復の所要時間が16時間を超える行程の為、小谷村から信濃大町駅前までは、別の運転手が乗務。バス利用の旅行の厳しさを実感する。訪れた「飛騨高山まつりの森」の高山祭りミュージアム。全長70㍍のアプローチトンネルを進むと、屋台蔵として日本初建築物の地下ドームの展示場に。地中空間は、紫外線・電磁波・放射線から守り、強固な岩盤は、地震などの災害時も安全との説明、文化財を守りたいとの強い想いが伝わってくる。その中に、江戸時代末期以来150年ぶりに中田金太施主が私財を投じて新造された平成の祭屋台（山車）7台、現存する屋台を3分の1で精密に造り上げた秋の高山祭屋台11台、世界一の和太鼓、日本一の神輿（みこし）など貴重な美術工芸品を間近で鑑賞。

その素晴らしさに、本番の高山夜祭りを訪ねたいと思う。会場の一角に祭りの説明。まつりとは、神々への精一杯の感謝と祈りを表すため、自分たちの持っているエネルギーを最大限使い、神々をもてなすのが「まつり」の原点との説明。身近で行われる祭りを、歴史的意味を持ちながら続けて行くためにも、参加する子供達にもしっかり意義を伝え、なぜ「まつり」をするのかを地域全体としてどの様に再認識しなくてはと考えてしまう。

昼食後、全国にただ1つ現存する徳川幕府郡代役所の国史跡の「高山陣屋」を訪ねる。施設スタッフの説明で、元禄5年から明治維新に至る177年、25代の代官・郡代が江戸から派遣された歴史が繰り成す史実を垣間見る。見学者は、建物の珍しさで笑顔が多かったが、その歴史の地元民にとっての幕府直轄領としての功罪の説明がほしいと思ったのは私だけだったのだろうか。

三之町などの古い街並みを自由散策。何度か訪ねたことがあったが、街並み全体の雰囲気が変っている。人力車の車夫の男性に訪ねると、「訪れるお客様に合わせて店構えが頻繁に替わる。今は、外国人観光客が大勢押し寄せ、特に台湾の皆さんは、民芸品の店舗が賑わうので」、「経営者が地元の関係者から外部資本に急速に替わっている」と寂しそうに話す。他に無い昔ながらの風情を残すことが地域に必要だと強く感じた旅でもあった。

昔の街並みに大勢のお客様、存続の理念が今後より強く求められていくのだろう

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）